

[学会] 第813回 千葉医学会整形外科例会

日 時：平成元年12月9日～10日

場 所：千葉大学医学部附属病院第1講堂

〃

第2講堂

1. 胸腰椎脱臼骨折に対する pedicle screw fixation の応用

高相晶士, 磯辺啓二郎, 南 昌平
高橋和久, 山縣 正康 (千大)
三枝 修 (成田日赤)
中田好則 (国立千葉東)

A-O internal spinal fixator を用いて不安定な D12 脱臼骨折の整復固定を実施し, 短期経過につき検討した。症例は20歳, 男性。第5胸髄以下の完全対麻痺を呈した。椎弓根スクリューにて整復, 後側方固定を加えた。前方椎体高は93%, 26°後彎は5°前彎に改善, 術後10日目に外固定なく車いす, 4週にてリハビリ開始, 術後6カ月の現在, 後側方固定は良好であり, 椎体高は術直後と変化なかった。本システムは, 解剖学的整復力, 固定性に優れ, 胸腰椎脱臼骨折に対し有用な方法と考えられた。

2. Narrowed dural tube を伴う高度側彎症の1症例

齊 藤 忍, 北原 宏, 南 昌平
磯辺啓二郎 (千大)

今回われわれは narrowed dural tube を伴う高度側彎症例に対し, stage 手術を行い良好な結果が得られたので報告する。症例は22歳の男性で, 腰痛および右背部のシビレを主訴とし, 入院時の Cobb 角は D₅-D₁₂ にかけて101°であった。この症例に対し, まず decancellation osteotomy を施行し, 術後より halo-femoral とし徐々に伸張し, 3週後 Chiba solid rod による後方固定を行った。その結果術後4カ月たった時点で Cobb 角55°, 矯正率46%と良好な矯正を得た。神経学的には, 左前腕尺側, 右背部に hypalgesia が, 右上腕内側に analgesia と奇異な知覚異常を認めたが, 機能的には問題を残していない。

3. Dysplastic type spondylolisthesis の1成人治験例

新井 元, 高橋和久, 磯辺啓二郎
山縣正庸, 村上正純, 宮本 和寿
三村雅也, 高橋 弦 (千大)

高度のすべりを呈した dysplastic type spondylolisthesis の一成人例を経験したので報告する。症例は19歳, 女性。ガラス製造業。腰痛を主訴として来院した。昭和59年より, 長時間歩行後に腰痛が出現。平成元年4月, 就職後に腰痛が増強した。当科初診時には腰痛のため, 約100mで歩行困難となった。身長168cm 体重70kg と大柄であり, 腰仙部の疼痛部位に一致して階段現象を認めた。神経学的には異常を認めなかった。日整会腰痛疾患治療成績判定基準は22点であった。今回, われわれは pedicle screw を用いた後方手術の後に二期的に前方固定術を行い, 良好な結果を得た。

4. 両下肢切断 (AK-BK) の義足歩行の検討

小沼恵子, 北原 宏, 山縣正庸
小野崎晃 (千大)

両下肢切断者の義足歩行について, 左下腿 PTB 義足 右大腿を一軸固定膝の股義足を用了仮義足で, 切断3カ月と6カ月後の習熟性の変化, さらに右大腿を荷重ブレーキ付安全膝, 股継手を遊動継手とした本義足に変えて, 歩行時間因子と床反力による歩行分析による客観的評価を行った。その結果, 義足歩行訓練により, 歩行の対称性, 安全性の向上は認められたが, 歩行速度, 歩行同期は変化しなかった。一方, 歩行速度は習熟性に左右されず, 義足の機能により当初より左右されることがわかった。BK 側反力パターンから両下肢切断も片側切断と同様ほぼ正常であった。